物語が自分に最も強く語りかけてきたことをまとめよう
国語科「ヒロシマのうた」より

１　対象学年　　小学６年生

２　ねらい

戦後６８年が経った今日、戦争は遠い過去のものとしかまだとらえることのできない子どもたちに、戦争のむごたらしさや、過酷な状況のなかで希望を失わずに生きぬく人間のたくましさなどについて考えさせることが大切であると考える。国語科の単元「ヒロシマのうた」は、それらを考えることができる教材であり、話し合うことを通して、平和についての大切さを考えていく。

本教材は、以下のように３場面で構成されている。

１場面…１９４５年、「わたし」が赤ちゃん（後のヒロ子）に出会う場面

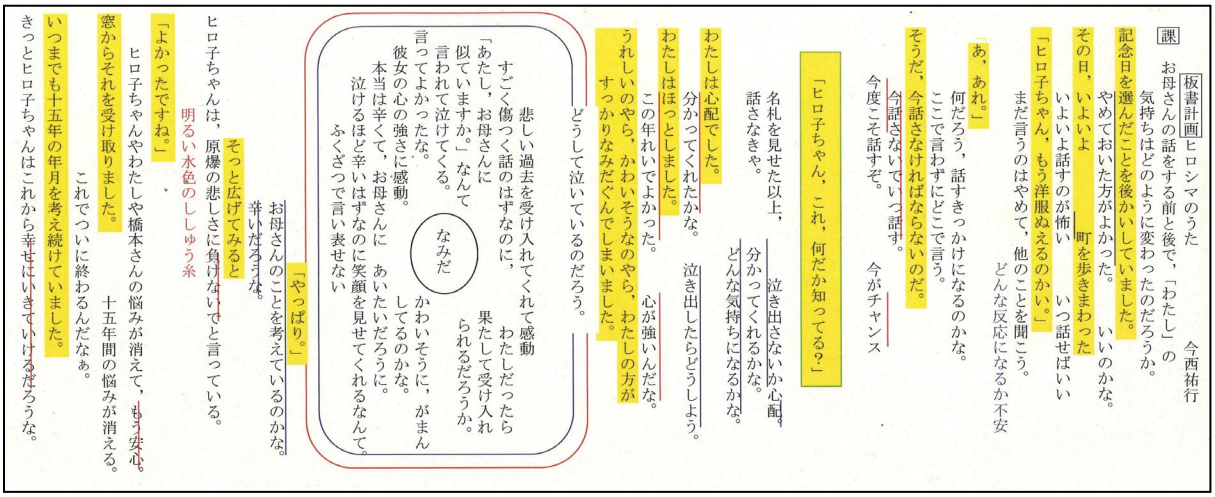
２場面…７年後、「わたし」が成長したヒロ子に再会する場面

３場面…１５年後、「わたし」が洋裁学校に進んだヒロ子に再会し、真実を告げる場面

水兵である「わたし」が、原爆投下直後の広島で瀕死の母親に抱かれた赤ちゃん（後のヒロ子）に偶然出会い、戦争での辛い思いを抱えながら生きていく姿がえがかれている。「地ごくの真ん中」「それがみなお化け」「目も耳もないのっぺらぼう」「水を求めてはい寄り、まるで激しい毒薬を飲んだように、水を口にすると、浅い水たまりに頭をつっこんで動かなくなっていく」といった、非常に恐ろしい非日常の世界がえがかれている。生々しい表現であるため、読み手が場面を想像しやすい。文章は主人公である「わたし」の目で見たもの、感じたものの体験がていねいに書かれている。事柄の説明や因果関係の記述といったことすべてが、「わたし」の視点を通してえがかれている。「わたし」の気持ちを考える叙述が多いので、それらを根拠にしてすすんで自分の考えを書く児童の姿が想像できると考えた。

話し合いを深めるためには、話し合いの際に特に場面の中で重要と思われる言葉、「キーワード」にこだわりをもたせる時間を設定することが必要であると考える。キーワードについて、こだわりをもたせて話し合いをすすめていくことで、戦争というものが人間の体だけではなく心も引き裂くものだという認識を深めることができ、過酷な時代を生き抜いた人間の逆境に負けない心の強さも学ぶことができると考えた。

３　準備　　ビデオ資料、ワークシート、板書計画、座席表、指名順計画



４　指導について

本単元では、「『ヒロシマのうた』が自分に最も強く語りかけてきたことをまとめる」ことを目標とする。「わたし」を中心とした登場人物の過酷な時代を生き抜く姿は、この物語の主題へとつながる。各場面での「わたし」と登場人物とのかかわりから、その時の「わたし」の気持ちを読み取らせる。そうすることで、主題である「自分に最も強く語りかけてきたこととは何か」という中心課題をめざす。

読みに入る前に、原子爆弾が広島に落とされた時のビデオを児童に見せる。普段の何気ないいつもの朝の町が、一瞬にして灰じんとなり、人間も影だけ残して消え去ってしまう様子を見せることで、原子爆弾というものの威力や脅威を認識させておく。これによって、生々しくえがかれた第一場面のヒロシマの様子を具体的にイメージできるようにし、読みを深める手助けとする。

一人読みで「わたし」の心情を考える際には、抜き出す叙述のどこが根拠になっているのかを考えさせる。「わたし」の会話文だけではなく、行動にも着目させて一人読みに取り組ませたい。なかなか考えがまとまらない児童には、机間支援で対話をしてキーワードとなる言葉を引き出したり、書き出せたことを朱書きによって褒めたりして、次の話し合いに積極的に参加させたい。また、自信をもって発言ができるようにするためにも、読み取って書き出したことはもちろん、振り返りにも朱書きをして褒める。そして、次の学習への助言を書くことで学習への意欲を継続させたい。

話し合いでは、まずは発言が苦手な児童から意図的に指名することで全員を話し合いに参加させる。「わたし」の気持ちについて読み取ったことを自分の考えと比較しながら聞き、話し合わせる。話し合いの中で、児童がその場面で重要になるキーワードとなる言葉を発言した際には、教員が個の発言を全体にきりかえすような発問をしてその言葉にこだわりをもたせる。

教員が切り返しをする際には、そのキーワードにどの児童もこだわることができるように、まず考えをまとめる時間として書く時間を設ける。そうすることで、すすんで発言できる児童はさらに考えを深めることができる。考えがまとまらない児童には、前時の一人読みでキーワードを拾い出した部分を読み返させ、話し合いの中で考えが変わったことがあれば書くように促す。その活動を行うことで、どの児童も話し合いに参加でき、話し合いに深まりが見られると考える。また、板書ではチョークの色を使い分ける。抜き出した叙述は黄色、「わたし」の喜びや幸せといった気持ちは赤色、悲しさや不安、迷いといった気持ちは青色で書く。このように色分けすることで、児童が「わたし」のヒロ子に対する気持ちの揺れ動きを視覚的にも理解できるようにする。

単元のまとめとして、「ヒロシマのうたが語りかけてきたことは何なのか」を考えて書かせ、話し合わせる。書く時になかなか考えがまとまらない児童には、教室に掲示した模造紙や教員が朱書きをしたところを読ませ、今までの学習を振り返らせる。また、自信をもって発言できたところや、対話を通して友達の発言で印象に残ったことは何だったかを考えさせて、書く手助けとしたい。

話し合いの後には、学んだことを生かして感想を書かせる。その感想では、人の心も引き裂く戦争についての認識や、その時代を生きた人の心の強さや希望に向かって生きる姿についても書くことができると考える。一次感想に比べ、考えに違いがみられることを期待したい。

６　本時の学習

⑴　本時の目標

お母さんの話をする前と後で、わたしの気持ちはどのように変わったのかを、友達の考えとかかわらせながら発言したり、自分の立場と比較しながら聞いたりすることができる。

（話す・聞く）

⑵　学習過程

時間	学　習　活　動	※子どもへの支援　◆評価
分 5	音読をしよう. ・p６ 9l4～p７ 3l1 ４まで立って音読をする。 ・音読終了後は座って自分のノートを黙読する。 お母さんの話をする前と後で,「わたし」の気持ちはどのように変わったのだろうか。 **「わたし」は記念日を選んだことを、後悔していました。** ・本当にこの日を選んでよかったのか。 ・この日に話すと、ヒロ子ちゃんはきっと嫌な思いをするのではないか。 **そんな話をしながら、「わたし」はふと窓の外を見ました。** ・本当のことの話を切り出すきっかけは何かないものか。 ・困った、どう切り出せばいいんだ。 **これ何だか知ってる？** ・よし、話すぞ。 ・話を受け入れてもらえるかな。 ・この名前は生みの親のお母さんの名前なんだ。ちゃんと伝えなければ。 **「わたし」は心配でした。** ・泣き出したりはしないだろうか。 ・きっと、ヒロ子さんを傷つけただろうな。 **「わたし」のほうがすっかりなみだぐんで** ・つらい思いをさせてしまったな。 ・何て心の強い子だろう。こんなに悲しい現実を笑顔で受け入れるなん	※自分が着目した叙述を気にしながら読ませたり、自分のノートを振り返らせたりすることで発言をしやすくする。 ※発言が苦手な児童から意図的に指名することで､自分の考えを発表できるようにする。 **いつまでたっても、そのきっかけができないままに、つかれてしまいました。** ・約束をしたんだ、言わなきゃ、言わなきゃ。 ・いつ、どのタイミングで言えばいいのか。 ・このままだと話せないまま終わってしまう。 **そうだ、今話さなければならないのだ。** ・ここで話せなかったら、二度と話す機会はない。 ・絶好の機会だ、真実を話せるのは今しかない。 ※友だちの意見を聞くことが自分の学びにつながることを理解させるために、友達の意見には積極的に反対やつけたしの発言をするように促 **じっと窓の外のとうろうを** ・ヒロ子ちゃんを直視できない。 ・お母さんが死んだ話を聞いてどう思うだろう。 ※「これ、何だか知ってる？」をお母さんの話をする前と後の基準とし、板書では黒板の中ほどに黄色のチョークで書き、緑色のチョークで四角く囲む。そうすることで､「わたし」がお母さんの話をする前と後を視覚的に区別しやすいようにする。 **「わたし」はほっとしました。** ・悲しむ様子がないぞ。・受け入れてくれたのか。 ・黙って聞いてくれたし、泣いていないようだ。 ※このなみだは、ヒロ子が話を受け入れてくれた喜びやふびんに思う心から出たなみだである。そこで、このなみだをキーワードとして、このなみだはどんな気持ちが込められているのかときりかえす発問をすることで、話し合いを深めるようにする。

このなみだには「わたし」のどんな気持ちが込められているのだろう

※話し合いに積極的に参加できるように、読み取りが苦手な子には、前時の段階で机間支援により、「なみだ」にどのような意味があるのかを読み取らせておく。

・ヒロ子ちゃん、受け入れてくれてありがとうと感激しているなみだだと思う。
・どんなことにも負けない、心の強い子になったんだなと感動したなみだではないかな。
・感動もかわいそうだという心も、いろいろな感情が混ざったなみだだよ。
・きっと辛い想いを隠しているのだなと，かわいそうに思うなみだなんだよ。
・なんて健気な子なのだろうとあわれに思うなみだだと思

※まず、ノートに書かせ、考えを整理させてから発言させることで、話し合いを深めていく。なかなか考えがまとまらない児童には、前時のうちに前もって「なみだ」について書かせておく。読み取りが得意な児童が、前時のうちに拾い出している場合には、考えが変わったところはないか問いかけ、さらに書かせる。

「やっぱり。」
・帰り道もなみだをながしていたようだし，やはり生みの親に会いたいのだろうな。
・悲しい現実を突きつけられたから無理もない。
・やっぱりあの話を聞いたせいで傷ついているな。
・心配だな，寝ずにふさぎこんでいるのかな。

「よかったですね。」
・この原子雲のししゅうは、彼女が過去を乗り越えたというメッセージに違いない。
・原爆を受け入れていなかったら、贈り物に原爆のししゅうなどしないはずだ。
・彼女は原爆で母親をなくしたという悲しい現実を直視できる、心の強い子に育ったのだな。
・辛い過去を受け入れた、前向きな姿から言った。
・心の強い子に育って、もう大丈夫だと安心だ。

※「やっぱり」や「よかったですね」という言葉からもわかるように、「わたし」はヒロ子に対して嬉しく思う気持ちと悲しく思う気持ちをもっている。そこで、板書の際には気持ちの種類をチョークで色分けをする。喜びや幸せといった気持ちは赤色、悲しさや不安、迷いといった気持ちは青色で書き、児童が視覚的にも考えを整理しやすくする。

※「よかったですね」のところで、「わたし」がお母さんのことを話す前と後の「やっぱり」までと比べて、いっそう喜びや幸せといった気持ちになっていることおさえる。そうすることで、ふりかえりの際に「わたし」がヒロ子について前向きに考えている気持ちを書けるようにする。

お母さんの話をする前と後で，「わたし」の気持ちはどのように変わったのだろうか。
「前」・「後」という言葉を使って１００字以上，２００字以内でふりかえりを書こう。

・「わたし」は、本当のお母さんのことを話す前では、いつ話を切り出したらいいか迷ったり悩んだりしていた。けれど、話した後は、ヒロ子ちゃんが受け入れてくれたし、原爆のししゅうが入ったワイシャツをつくってくれたことで、もう安心だ、１５年続いた不安がなくなったと安心した。

※ふり返りをして、２～３人の児童に発言をさせることで、振り返りを書くことに苦手意識をもつ児童が書く参考にできるようにする。

〔話す・聞く〕　（発言・活動の様子）
◆Ａ基準…自分の考えを友達の考えとかかわらせながら発言し、友達の発言を自分の立場と比較して聞き、キーワードにこだわって発言することができる。
※児童の発言を板書し、この意見に対してどう思うかと問いかける。
◆Ｂ基準…自分の考えを友達の考えとかかわらせながら発言でき、友達の立場と比較して聞き、ふり返りに新しく気づいたことや分かったことを書くことができる。
※教員が朱を入れた箇所を発言するよう促す。